令和４年度山本地域振興局社長会議の概要

令和５年２月８日（水）

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　午後２時～３時３０分

１　開催趣旨

新型コロナウィルス感染症の影響により社会経済が大きく変化する中で、各企業が持続的な成長を実現していくためには、デジタル先進技術を活用し、各分野における効率化を促進していく必要がある。

特に建設業は人手不足、後継者難のため、ＤＸ化による効率化が急がれる業界である。このため、経営者がデジタル先進技術に対する知識を深め、利活用による生産性向上と魅力的な職場づくりによる人材確保の基礎となる環境づくりを目指し、参加７企業と意見交換を行った。

２　講演

講　師：みらい株式会社　シニアマネージャー　藤井健史氏（オンライン参加）

演　題：建設業界におけるＤＸ推進

３　意見交換会

○Ａ社：直轄工事のドローン測量と、ＩＣＴ施工はやっているが、会社全体として取り組んでいるものはない。ＤＸ化の過程で、これまで使っていたものが全部ダメになってしまって買い換える必要があるのかがよくわからない。会社が小さいので、できる人に押しつけることにならないか？一人の負担が過重になりすぎないか不安である。

　○Ｂ社：ＤＸの仕組みを勉強すると必ずぶち当たるのが、ソフトを組み込んだシステムの構築なのか、自社の能率化を上げるためのＤＸなのかという問題。現在のところ、ある会社の協力で自社設計を組もうとしている。

すべての工事に共通して使える社内システムは、一気にはなかなか難しい。小さいパッケージを作ってそれを膨らませるやり方をしている。

大きな課題は運営する主体。現場での指示はベテラン世代だが、この世代はなかなかＤＸが馴染みにくい。もう一つは民の工事も官の工事も有資格者の配置が必要。結局は現場にいるのが実際である。弊社だけでなく、発注機関、下請けで重層的な仕組みを考えないとＤＸにつながらないと危惧している。

　○Ｃ社：ＢＩＭ／ＣＩＭを活用している。ＤＸはまず受注に必要なので、まず受注して、その流れでやってみようとしているが、ＤＸにマッチしてどんどん新しい提案をしてくる人もいるが、とても難しいという人もいる。

今後下請けにどんどんＩＣＴ施工が下りてくる可能性があるが、弊社は結構下請けが多いので、率先してＤＸ化している下請けとして、元請けから「ここなら理解しながら施工してくれる」と思ってもらえることを強味にしていきたい。

○Ｄ社：遠隔臨場を使っている。現場ではデジタル工事写真の電子黒板を使っている。現場で撮影したものがクラウドで共有できる。導入当初は若い職員が主に使っていたが、意外と幅広く使われている。またチームスのクラウドを使って書類、写真、図面などの共有ができる。２０年前に社内サーバを導入して共有していたが、クラウドだとスマホで見られるので、お客さんに見てもらいながら打合せすることが可能になっている。

　　平坦性の測定は、以前は紙のロールから一日がかりでデータを拾っていたが、機器の導入によりＰＣにつなぐだけで一覧が出てくる。その分かなり手間と時間が短縮された。ＤＸ化はついてこれる若い世代が必要と思うが、今のところ世代間の会話はできている方かと思う。

　○ Ｅ社：国発注の仕事ではＤＸ化に取り組まねばならないのは事実。最近後付けのマシンガイダンスを導入した。２０代の社員はＤＸにスッと入っていけるが、若い年代に比べて、ベテランは感覚でとらえる事に抵抗があり、説明し理屈を理解してもらう必要がある。ＬＩＮＥワークスを導入しているがそれはラクだから。外出中でも資料が見られる。事務所にその都度連絡しなくてもよい。

　　　外国人実習生との会話はスマホ翻訳も使うが、彼らには日本語の試験があり、翻訳機を使いすぎると勉強にならないので多用しすぎず日本語で会話している。ＤＸは難しく考えすぎない。「こっちの方が早い、こっちの方がラク。」という観点で導入している。

　○Ｆ社：今のところＤＸを導入しようとは思っていない。ＩＣＴを覚えるための時間もコストもかかる、この工事のためにＩＣＴ化する必要があるのか？大規模なものを作る工事が連続してあるのならともかく、大規模な工事も小規模な工事も同じルールを適用してほしくない。便利なものは取り入れたいが、ルール化されると困る。国の工事はＩＣＴは選択制であり、それにより加点になるかどうかだが、入札で指定されてしまうとデメリットの方が大きい場合がある。

　　　一番のデメリットは、人と人とのつながりが薄くなってしまう。電子入札導入でも以前は顔を合わせていた人たちと会わなくなってしまった。

　○ Ｇ社：以前ＩＣＴ施工で賞をいただいたが、続いていないのが実情。経済産業省は２０２５年の崖として、ＤＸを進めなければ１２兆円もの経済損失の可能性を指摘している。深刻な人手不足の中、以下のように取り組んで行きたい。①スマホ、タブレットによるリモート会議。リモート現場把握とそれに基づいた指示。将来的にはＢＩＭ／ＣＩＭの活用。②ＩＣＴ建設機械の導入とＩＣＴ施工。③様々な集計を迅速化して早めの経営意思決定につなげる。

　　　更に既存システムを長い期間利用していたことによって、肥大化かつ複雑化している。対策としては①ＤＸ化の人材を全社的に探す。いなければ外部からの採用を検討する。②既存のアナログシステムをひとつずつ把握して徐々にＤＸ化していく。③会社がなぜＤＸ化を進めるのかを経営者が明確にして、社内で共有する。④ＤＸ化には充分な資金が必要。国や県にはＤＸ化に係る補助金や支援制度の拡充をお願いしたい。

４．講師から感想

　　○「特定の人にＤＸ化を押しつける問題」は結構よく聞くキーワード。できる人に他の社員・部署から見てしっかりと分かるように、ＤＸ化推進という役割を与えると共に、他の仕事を軽くしてあげるといったバランスを考える必要がある。

　　○「社員にとって居心地の良い環境を作る」ということはＤＸ化の大切な目的の一つ。企業は利益を出すことも大切だが、働きやすい環境を作っていくことはＤＸの根本的な理念でもある。

　　○ＤＸを先行して導入している身近な会社が、どのようにＤＸに取り組んでいるのか他企業の事例を見に行ってみるということはとても大切。こうして情報交換の機会があったので、率先して導入している事例を見に行く機会を作ってはどうか。

　　○ＤＸ化によって仕事は捗るのだが、長期的に見て社員の心身のバランスや労働環境を崩さぬように、何のために入れているのかという目的を常に振り返ることが大切。

　　○国はＩＣＴを推進しているが、現状と実情が合っていない場合がある。そのままにしておくと乖離が進んでしまうので、声を集約して伝えていくことが重要。

　　○ＤＸ化はＢＰＲ（ビジネスプロセス・リエンジニアリング＝既存の組織や制度を抜本的に見直すこと）の観点からもご検討願いたい。ＢＰＲに取り組むことで、自社として残すべきコア業務を見極め、その業務に関して、デジタル化等に取り組むのが本来の順序。

５　会議の成果

この社長会議を通して、既に一定程度ＤＸを導入している企業には更に推進するためのヒントを、入口に立っている企業にはＤＸ導入のモチベーションづくりになったのではないかと考えており、引き続き管内企業の状況に応じた情報提供や意見聴取を行っていきたい。